

禅の友

Zen no Tomo

10

October 2024





ご本山だより 大本山永平寺【乞暇こうか】

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二



十月は永平寺での修行を終えた多くの修行僧が下山あきさんをします。

自ら進んで修行道場を出ることを乞暇こうかするといえます。修行の暇を乞うということです。

本来は身内の不幸などで半年ほど修行道場を離れることを意味していましたが、現在では修行道場を出て師匠のお寺へ戻ることを意味するようになっています。

乞暇をする者は、山内の各所にて乞暇の拝をします。その後、山門にて最後のお拝をし、着物の裾をあげ、網代笠をかぶり、草鞋を履いて永平寺を出ていきます。

山門を通ることができるのは上山をする時と下山をする時のそれぞれ一度だけ。ここを出てしまえば戻ることはできません。

乞暇をしていく者たちの晴れ晴れとした顔とは対照的に、冗談をいいな

がら彼らを見送る者たちの笑顔からは、寂しさが感じられます。

寝食を共にし、修行に励んだ仲間との別れです。

次に会う時はお互いどの様な僧侶になっっているのかわかりません。もう二度と会うことがないかもしれません。「頑張れよ」とお互いが声を掛け合い、その背中を押してやることしかできないのです。

予定していた者が全て乞暇をする、とたんに境内が静かになります。修行僧の数が減り、坐禅をする僧堂ぼつどうも、朝課をする法堂ほつどうも、それまでよりも人氣がないガランとした空間に感じます。

気がつけば、朝晩は涼しさではなく寒さを感じるようになっていました。

もうしばらくしたら、また厳しい冬がやってくるぞと気をひきしめ、着物の襟元をただします。



ご本山だより

大本山總持寺

【御征忌と慶讃法要】

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二二

何処より香り放ちて金木屋

(湯澤正枝撰)

秋の季語にもなっている金木屋の花の香りが漂ってくると秋のたけなわを感じます。

さて、總持寺では十月十二日から十五日に亘って御開山瑩山禪師・二祖峨山禪師（お二方を御両尊と申します）をお慕いし、その慈恩に報いる為の「御両尊御征忌」が営まれます。

また今年は瑩山禪師七百回大遠忌の年でありますように、この期間に併せて十月九日より慶讃法要も勤まります。

全国から選ばれた焼香師さまが禪師さまの御代理として法要の導師を

お勤めになられ、報恩の誠が捧げられます。

また近年、修行僧の減少によって、この度の法要も全国からの厚いお手伝いをいただかなければ到底円成出来るものではありません。

このような一人一人の和合の心があることは有難い限りです。

これを瑩山禪師は「たとひ難値難遇の事ありとも必ず和合和睦の思ひを生ずべし」と示されたのです。

尚、四月から勤まってきました七百回大遠忌も一応この法要を以て最終章となります。

また、總持寺では十月より冬安居制中に入り、首座和尚（修行僧のリーダー）を中心に年明けの正月半ばまでの一〇〇日間の修行期間が始まります。

選・坊城俊樹

広重の線となりたる大夕立

石川県 藤江 光

評

歌川広重といえば、「東海道五十三次」の雨を渡る絵などが有名。そこに走る人たちは大夕立の中を足早に走っている。その雨の勢いを「線」と言い切った作者は見事。俳句の描写とはこのようにシンプルに言い切るとものすごい余韻が生まれる。

墓参今ここに居るこの不思議

山口県 稲村 みどり

評

「墓参」という季題は盂蘭盆に祖先の墓に詣ること。俳句では八月。この作者はご先祖の墓の前に立って自分がここに居る不思議を思う。たしかにそこに居ることはご縁があったからなのだが、そうして何代もの家族がこの墓を守ってきたのである。

◆ つと聞くドア秋風とたましひに

大阪府 柏原才子

◆ 夏深し緑青ふきし鍼力店

千葉県 長澤きよみ

◆ 凡フライ捕り損ねたり雲の峰

神奈川県 佐野 勇

◆ ストローを急いでのぼるソーダ水

岩手県 鈴木道昭

◆ 箱眼鏡あれが竜宮城跡か

鳥取県 眞山博充

◆ 鉦太鼓クライマックスかき氷

大阪府 口本美智子

◆ 山青葉鳥居の上の石いくつ

愛媛県 井上征郎

◆ 流灯も南無三宝を唱へつつ

北海道 堺 隆

◆ 先づ泥を落とすに使ふ日向水

静岡県 小川健治

◆ 再びの浪漫かきたて月見草

兵庫県 内藤昭子

選者吟

アロハシャツだらけのアロハシャツ問屋 俊樹

作句小見

これは東京の上野の「アメ横」を吟行したときに作った句である。この商店街にはあらゆる洋服の店があるが、中にはアロハシャツしか売らない店もあった。アロハシャツなのですべてが原色でそれがなんとも豪華というかチープで面白かった。

選・長澤 ちづ

水平線埋めしかつての光景を思ひ出しつ
つ漁火かぞふ

北海道 加藤 智子

評

「水平線を埋めし」という詠い起こしに、曾ての
その地の漁業の盛況ぶりが的確に把握されてい
て、思わず惹きつけられた。目の当たりにする
漁火を「数えるほど」と言わずに「かぞふ」と
行為で収めたところもすぐれている。

たつぷりの真水で洗ふ墓熱し学徒兵とふ
若き命の

大阪府 柏原 才子

評

前途豊かな若者の余りに無残な死に対する思い
が、渦巻く三句目の「墓熱し」である。炎天下
で熱いと取られないためには「洗へど」と逆説
にしたい。

◆ レース編みほどこゆくごと白波を立ててフエリーは海峡すすむ

秋田県 小松 紀子

◆ 故郷に立ち寄る家は無けれども路地風吸ひに今度帰らむ

岐阜県 後藤 進

◆ 買い置きのか創膏の一枚が今朝擦りむいた傷に優しい

山口県 濱田 道子

◆ 真つ新な紙に歌詠むペン先は荒野を駆ける子馬の如し

鳥取県 眞山 博充

◆ SLの二台で引きし貨物車の五十二連を孫に語りき

島根県 横山 豪吾

◆ 避雷針に何を話しているのやら何度も頭を下げる鳥

福岡県 三吉 誠

◆ 二度三度あわれ辞書引きたしかめて子を持つ孫へ夏見舞い書く

岩手県 穴戸 さとる

◆ 児らの声太鼓の響き風にのり瓦礫を越えて輪島の街に

三重県 藤川 幸子

◆ 朝霧の時かけ上がるこの国の人は静かに列に連なる

ロンドン バロー 典子

◆ 助産師の亡母の手に生れし級友ら今の命の感謝を吾に

宮城県 須藤 智恵子

選者詠

アマリスわが鬱屈を引き受けて紅深くする

ちづ

水無月の空

作歌小見

カラスの人間的な仕草を捉えて詠う三吉さんの視点の優
しさに注目。また穴戸さんのお孫さんへ向ける優しさにも。辞書を
引いて言葉を確認することは少しも「哀れ」なことではなく、皆さ
まも大いに辞書に親しみ言葉を深めましょう。